



光合成が活発に行われる葉の周辺のCO₂センサーから温度情報が制御盤に送られる



CO₂ホースに黒い多孔質のホースを繋ぎ(左側)、株元にCO₂を供給する



外気を取り込む天窓。開閉により効率よく温度コントロールを行う



ボイラー。冬季の暖房だけでなく、最適温度の風を送る

北・南ハウスの間にCO₂施用のボンベが並び



現在の運転状態を確認できる

コンダクターの制御盤一式

置でも携帯電話からでも行える。

「冬場は外気が入るとハウス内温度が一気に下がり、温度センサーでハウス内の温度変化を感知して0.1℃単位での温度設定で天窓を開け閉めできるのも嬉しい。

ブルーベリーはハウス内の遮光カーテンを閉めることにより陽の当たる時間を短く

することで秋や冬を感じ、ある程度の寒さも併せて感じることで花芽をつけさせる。しかし、夜温を低くしなければならぬなど、難題はいろいろ。ここは夏場が結構熱いので、温度を下げるためのハウス用のクーラーを導入するかどうか議論があったが、かなりの高額となり無駄も多いと感じる。

実際に遮光して、陽を短くしていくことで普段は2月くらいに収穫できるものを昨年は12月に収穫でき、目標とすることができた。

ただ、今回遮光試験したハウスに病

気を蔓延させてしまい、だいぶ収量が減ってしまった。環境づくりに失敗したと思う。失敗を繰り返し試行錯誤で技術を作っていくしかない。

風も大事

重油燃料のボイラーは暖房というだけではなく、ハウス内空気を温め、一部外気も取り込んで温度コントロールし、風を送り出している。周りに小さな穴が開いたビニールの袋が温風で膨らみ、温風の経路が通路に伸びて、直接株元に温風を送っている。排ガスは外に排出しており、CO₂を施用としては使用しない。この加温器の運転も『コンダクター』で制御している。

「葉の周辺に風がなく空気が淀むと、葉の表面に葉面境界層という高湿度層ができCO₂が吸えない環境を作ってしまうが、葉が揺れるくらい風があると葉面境界層が破壊されCO₂を吸いやすくなる。夏には暖房はしないが、外気で最適な温度を作り、それを送って風を作ることが育成のためにかなり重要となっている」。



遮光時に自動的に閉まる遮光カーテン



ハウスは開口部を閉じれば密閉されており、外気の取り入れで効率よく温度調節できる

戦略的に品種選び

ここで扱う品種はすべてオーストラリア品種。専門業者から苗で買ってくる。ポット栽培で行うとだいたい10年くらいは栽培可能とのこと。現在は大粒のユリカという品種メインで育てている。

浜松は2月～4月までは全国の80%くらいのシェアを占め、生産量としては全国でもトップクラス。ただ5月くらいから全国的に出荷が増え始め、シェアを落とす。安間氏は「来年、再来年にはトップになる」と意気込む。「安定した量を生産しながら大玉の果実を作る技術も併せて研究し、海外に負けない品質を追求していきたい。ブルーベリーのイメージから今は酸っぱいものも許されるが、今後は他の果物みたいに甘さも求められるようになるだろう。毎年、海外から最高品種といって新しい品種が次々出るので、様々な品種を試していく。まずは玉の大きな『早出し』をメインに狙い、品種を吟味しつつ『美味しさ』も追求していきたい」。

ブルーベリーは人気、まだまだ売れる

「金額はクリスマスでは通常の時期の1.7倍で売れる。経費がかかっても収益が高くなる。2月～3月下旬までは少し下がった高値で維持されるが、それ以降はガクンと値段が落ち4～5月からは通常の価格で維持される。

他の地域で販売していない時期には貴重となり引き合いも多く、まだまだ需要はある。売上も伸ばしていける。

ブルーベリー以外にもレモンやイチジクも始めている。もともと無駄のない農業をするために始めた農業なので、ブルーベリーで収益が出るまでは自分で『移動販売車』を作ってイベントに出展しながら傷モノを加工して作ったシロップなどを使い、かき氷やホットサン

ドなどを販売してきた。今は農業に集中しているが、車はまだあるのでいつでも再開できる。

また、当初からドライフルーツを作りたいと思っており、これも工場を建てる計画を少しずつ始めている。

東日本震災の際の不安から臨海部の工場が内陸に移転する動きもあり、この辺りの農地を確保し続けることも課題となっている。課題はいろいろあるが、ポジティブな畑人を続けたい」。

ブルーベリーの年間出荷価格(¥/kg)

